



## 佐藤純先生を偲んで

富田 功

5月の末、小橋浅哉先生（東京大学理学部）から明治大学名誉教授 佐藤純先生が亡くなられたと伺ったときの顔から血の引くような思いを今も忘れることができません。

佐藤先生は、私の数年後輩で、同じ研究室で5、6年ご一緒でした。皆から「純さん」と呼ばれていました。純さんは、東大での卒研から大学院にかけて田無<sup>たなし</sup>にあった原子核研究所を根城にして、核分光学の仕事に取り組んでおられました。理学部助手時代には、放射性炭素による年代測定システムの構築するために主導的な役割を果たされました。これには現在は奥様でいらっしゃる大河朋子さんも大きく貢献されました。

フランス留学中は、アポロ15号が持ち帰ってきた月面の砂の<sup>22</sup>Na、<sup>26</sup>Alの測定から、宇宙線強度の経年変化を10gの試料で結果を出され、優れた研究能力を存分に発揮されました。

帰国後は火山国の日本ならでは、という研究対象を選ばれました。火山ガスから放出されるRnの測定からマグマの脱ガスの程度の調査、放射性温泉沈殿物の研究、温泉水中のRn濃度の変化と群発地震との関連、大気中の放射性鉛同位体の測定と季節変動や気象との関連など、基礎研究であるとともに、火山活動の監視に重要な知見を提供されました（本誌2011年9月号「私のRI歴書」参照）。

明治大学を定年退職なさるまで、純さんはこれらの仕事を熱心に続けられ、*RADIOISOTOPES*誌にも多くの投稿をされました。当時、私は同誌の編集委員長を務めており、論文の完成度の高さに感銘を受けておりました。

日本アイソトープ協会では、理工学部会常任委員、協会理事、アイソトープ・放射線研究発表会幹事などを歴任され、本年の第50回研究発表会の会場責任者にも予定されていて、本当に最後まで協会を愛しておられました。76歳でした。

2009～10年にかけて、私たちの恩師である斎藤信房先生の記念誌を作ることになり、純さんに編集委員になっていただきました。斎藤先生の著作を幾つか転載することになり、候補の論文が多数集まりました。私たちはこれらを純さんに丸投げして、この中から数編を選んでいただきました。彼の決断力に頼ったのです。

純さんの若い頃の思い出を少し述べさせていただきます。江戸っ子の彼は時に口では景気の良い物言いをされることがありましたが、非常に慎重で几帳面な方でした。学会の前になると、綿密に準備を始めるのです。私の方は色々な仕事に追われてなかなか準備ができません。それを見て取った純さんは「備えあれば憂いなしだよ、富田さん」と得意げでした。対抗上、「こっちは備えなくて憂いなしだ」と苦し紛れの出まかせを言って撃退したものです。

純さんが院生で私が助手だった50年ほど前、大阪で行われた学会の後、純さんと紀州を旅行したことがあります。写真をたくさん撮ったものの、いつまでも整理がつかず、何年か置きに思い出しては「あれ何とかしなくちゃね」と言い合っては遂に果たせないままになってしまいました。

佐藤純先生、ありがとうございました。心よりご冥福をお祈りします。

（お茶の水女子大学名誉教授）